

本所発

広域発

DATE:2023年6月17日,10月1日
『ワイン用ぶどう定植・収穫体験会開催』

DATE:2023年11月2日
『ffフォーラム開催』

中頓別町では、ワイン用のブドウ栽培に取り組んでおり、定植体験会（6月17日）、収穫体験会（10月1日）を開催しました。定植体験会では、参加者64人が主力品種である「山幸」370本ほどを植えました。収穫体験会では、参加者45人が参加し、約75kgのぶどうを収穫することができました。収穫されたぶどうは醸造用として加工が可能かどうか調査することとしています。

宗谷農村女性連絡会議（ff宗谷）の研修交流会「ffフォーラム」が東宗谷農業協同組合（浜頓別町）で開催され、26名の参加がありました。フォーラムでは、乳房炎をテーマに、講習とグループワークを行いました。グループワークでは、4グループに分かれ、常日頃の疑問や悩みを話し合い、有意義な時間となりました。



定植体験会



収穫を迎えた圃場



フォーラム参加者



グループワークの様子

そうやのグループ・組織

The Group of SOYA

農村生活文化 伝承活動をすすめる会

農村生活文化伝承活動をすすめる会は、豊富町の女性農業者（14名）を中心に結成された組織です。昔ながらの良いものを次世代や地域住民へ伝えながら、農村の魅力向上と地域の活性化を図ることを目的に活動しています。

本会は昭和60年に始まった「農村生活文化伝承展」において、農産物や手工芸品などの展示販売を行っていた運営メンバーが、伝承展にとどまらず地域の活性化に寄与したいと、平成4年に結成されました。

現在の主な活動は「農村生活文化伝承展」での展示販売が中心ですが、その他地域イベントにも参加しています。イタドリを使った惣菜等を販売または提供しており、地域住民からも好評を得ています。

多くの人はイタドリを雑草と認識していますが、春先に収穫すると柔らかく食用になります。イタドリの加工は本会が始まって以来行われており、長年に渡り引き継がれる味わいを次世代へ伝え続けています。

普及センター宗谷北部支所では、本会の目的達成に向けた活動を、引き続き支援していきます。



第40回農村生活文化伝承展



収穫したイタドリの下ゆで

今号の表紙

放牧地へ向かって歩く牛～中頓別町 十倉農場

春先の放牧が始まった時期に農場へお邪魔し、撮影させて頂いた写真です。

春先の栄養たっぷりの放牧草を求めて木々の間を抜け、放牧地へ向かっていく牛。放牧地へ到着後、たくさん青草を食べていました。

おしらせ

ホームページもご覧下さい！

ホームページでは地域の話や技術情報などを掲載しています。

【検索】宗谷農業改良普及センター 右のQRコードからも閲覧できます。

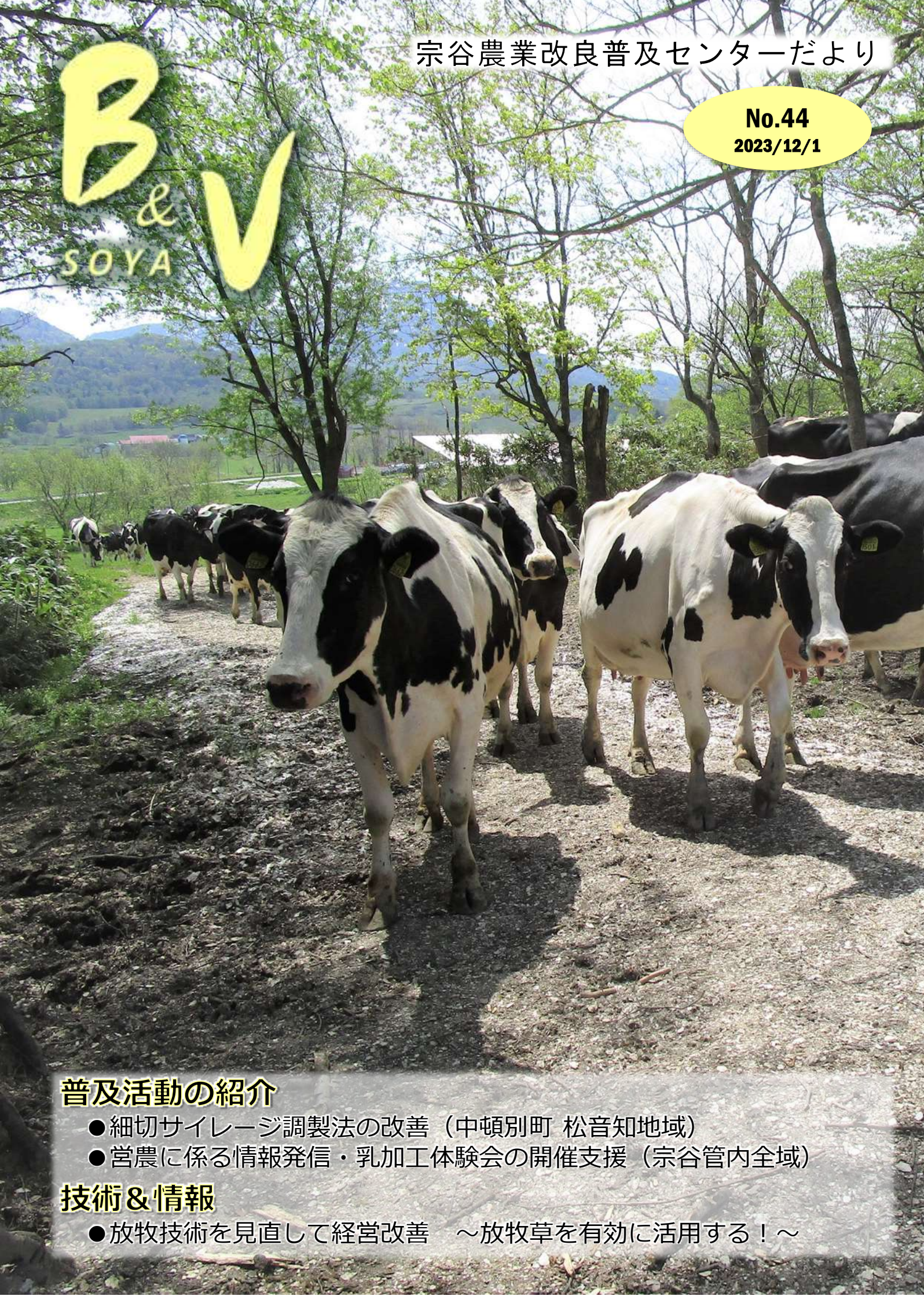


普及活動の紹介

- 細切サイレージ調製法の改善（中頓別町 松音知地域）
- 営農に係る情報発信・乳加工体験会の開催支援（宗谷管内全域）

技術&情報

- 放牧技術を見直して経営改善 ～放牧草を有効に活用する！～



B & V SOYA

活動紹介

細切サイレーシ調製法の改善

本所地域係

中頓別町・松音知地域

普及センターでは、良質な粗飼料を活用した生乳生産と題して令和3年より中頓別町の松音知地域を対象とした重点活動を行っています。

令和5年度は、細切サイレーシの発酵品質向上をねらいとしてバンカーサイロ内への異物混入防止対策を実施しました。取組内容はダンプが出入りするバンカーサイロの入り口周辺に加熱処理されたホタテの貝殻を敷きました（写真1・2）。

その後、令和5年産のバンカー開封後に粗飼料分析を実施し、取組結果を評価しました。

今回の異物混入の評価方法として、一般的に異物や土砂混入が起きると高くなると言われている粗飼料分析値のAsh（灰分）の含有率を用いました。ホタテの貝殻を敷いた前と後ではAsh（灰分）の含有率が約3.5ポイント低下し、異物混入が減ったことが推察できました（図1）。また農業者からは「以前よりもカビや変敗している部分が減り、取り除く作業時間も短くなった。」との声が聞かれました。令和5年産のバンカーはまだ1本しか開封されていないので、残りのバンカーが開封された後も検証を続けていきたいと思っております。



写真1 施工前のバンカー周辺

写真2 施工後のバンカー周辺

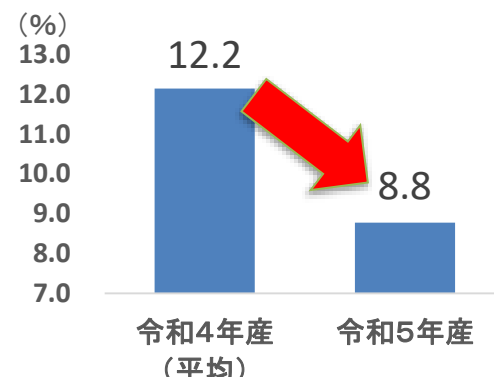


図1 Ash(灰分)の含有率の変化

活動紹介

①営農に係る情報発信・②酪農家が講師となり乳加工体験会を開催

本所広域係

宗谷管内全域

<①情報・クリーン・有機>

普及センターでは、より多くの人に情報発信することを目的とし、農場への訪問、ホームページやFAXなどで情報の見える化や営農に係る情報提供を行っています（写真3）。

特にホームページでは、図表化した統計情報や酪農に係る技術情報、FAXでは、時期毎に実施すべきことの確認や、気象災害の多い時期には事前に防災情報を発信しています。

最終ページに記載したQRコードからも閲覧できますので、是非ご覧ください。



写真3 農業者への情報提供

<②高付加価値化>

付加価値活動実践者の活躍の場面づくりを進めるため、酪農家をはじめ、地域の関係機関の方々と協力し、乳加工体験会の開催を支援しています。9月9日に開催した、幌延町教育委員会が主催する「ふるさと自然体験チャレンジ教室 酪農体験」では、幌延町ナチュラルチーズ研究会の平野氏他に講師を担って頂き、地元の小学生等にチーズづくりを体験してもらいました（写真4）。

今後もこのような取り組みを継続し、実践者の方々の活躍の場面づくりを進めていきます。



写真4 講師を担った平野氏とチーズ研究会の方々

技術情報

放牧技術を見直して経営改善 ～放牧草を有効に活用する！～

輸入飼料が高騰する中で、放牧飼養している酪農家の皆様は放牧技術を見直して飼料費の節減を図ることが必要です。

放牧依存度を高めて所得増加！

放牧飼養は、放牧頭数と放牧地面積から依存度が決まります。放牧依存度が大きくなると飼料の構成が変化して、濃厚飼料の節減に結びつきます（図2）。また、研究成果から「放牧無」と比較して放牧依存度「大」では、農業所得が124%になります（表1）。

放牧地（0.27ha/頭）と兼用地（0.23ha/頭）で0.5ha/頭の面積を確保することで、放牧依存度が「大」になります。土地条件により異なりますが、1番草収穫後の兼用地の確保が必要です。

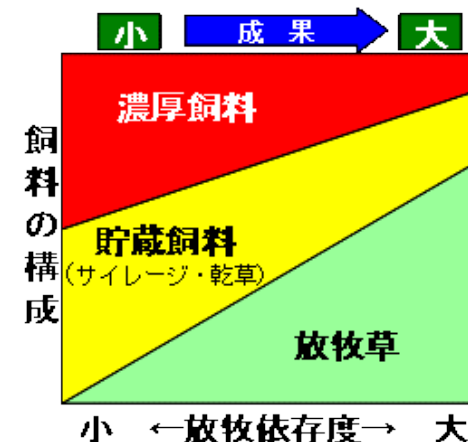


図2 放牧依存度と飼料構成の変化

表1 放牧依存度と農業所得の比較

放牧依存度	放牧無	小	中	大
経産牛頭	50			
個体乳量 kg	8200			
放牧時間 hr	0	4	8	22
草地面積計 ¹⁾ ha/頭	0.74	0.77	0.78	0.80
放牧地 ha/頭	0.00	0.09	0.18	0.27
兼用地 ha/頭	0.00	0.80	0.15	0.23
採草地 ha/頭	0.74	0.60	0.45	0.30
農業所得 ²⁾ %	100	105	110	124
農業所得率 %	23.5	24.6	25.9	29.1

注) 1) 経産牛1頭当り、2) 「放牧無」を100%として。

出典) 天北地域における集約放牧技術の現地実証と経営成果（H14年指導参考）より。

放牧草を有効活用するための施肥管理！

放牧草を有効に活用するためには、施肥管理が重要です。放牧地では、放牧中に乳牛が排泄するふん尿も養分として評価するため、採草地より施肥量が少なくなります（表2）。また、施肥時期は放牧方法により4タイプに分けることができ、放牧地の採食可能草量により決める必要があります（表3）。

放牧草を十分活用するためには、①放牧時の牛の観察（採食量）、②放牧地の採食可能草量の把握、③不食過繁草の確認が必要です。

放牧草を有効活用するための短草利用！

放牧草を短草利用することで、放牧地から高い栄養を摂取することができます（写真5）。しかし、夏場以降、放牧牛群の乳中尿素態窒素（MUN）が17.5mg/dlを超えることがあれば、①エネルギーの高い濃厚飼料を給与、②併給粗飼料を制限給与し疾病の発生や繁殖成績の悪化を防ぐ工夫が必要です。



写真5 放牧草の短草利用

表2 放牧地の施肥成分(年間)

マメ科率	N	P2O5	K2O
15~50%	4 ± 2	4 ± 1	5 ± 1
15%未満	8 ± 2	4 ± 1	5 ± 1

注) マメ科率により施肥量を選択。

表3 放牧地の施肥時期

施肥回数	5月上旬	6月下旬	7月下旬	8月下旬	備考 (放牧方法により選択)
1		●			スプリングフラッシュ後
2	●		●		放牧開始時期の早い牧区 (小牧区の場合)
		●		●	放牧開始時期の遅い牧区 (中牧区の場合) ※最初の施肥はスプリングフラッシュ終了後
3	●	●		●	基本となる放牧地の施肥

注) 1回当りの窒素施肥量3kg/10aを上限として、均等に分施。

出典) 北海道施肥ガイド2020